



キーワード

超越的? 超越論的?

読まれざる名著「純粋理性批判」



イマヌエル・カント
Immanuel Kant
(1724-1804)
ケーニヒスベルク
(ドイツ)

「工藝とは何か」を考えるヒント

『工藝の道』（柳宗悦）との共通点
わからない民藝の秘密に迫る

「純粋」「理性」「批判」

Kritik der reinen Vernunft

人間の理性には、
ある種の認識についての奇妙な宿命がある。
理性は退けることのできない問いに悩まされる。
問いは、理性自身の本性によって課されているからだ。
理性はたほうまたその問いに答えることもかなわない。
問いは、人間の理性が有する能力のいっさいを超えている
からである。（序文冒頭）

人間とは、
この世界で解決することのできない問いに
悶え苦しむ存在

出発
子供のころ誰もが思い悩んだ問い

- 1、時間には始まりと終わりがあるのか？
- 2、宇宙には果てがあるのか？
- 3、物質はどこまで分割できるのか？
- 4、死んだあと、魂は存続するのか？
- 5、神は存在するのか？

二律背反 antinomie

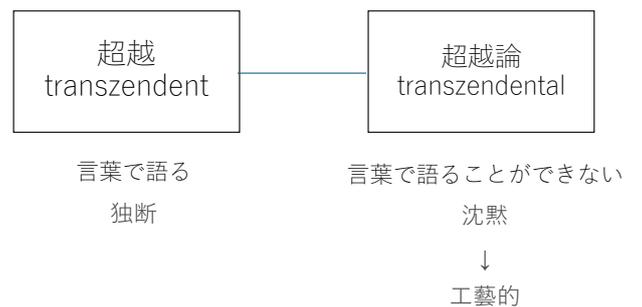
時間には始まりがある
時間には始まりがない

空間には果てがある
空間には果てがない

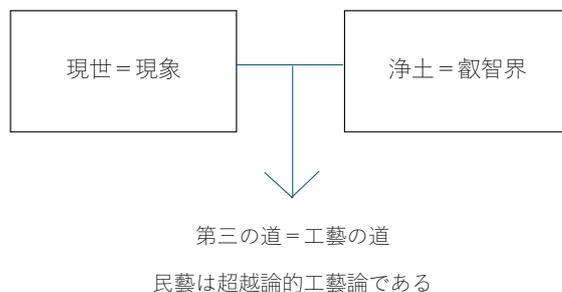
神は存在する
神は存在しない

理性の限界を定める（批判）

その上で真理を求めて叡智の海に漕ぎ出す。
そこで味わったものは語るができない。
故に沈黙せざるを得ない。



心は浄土に誘はれ乍ら、身は現世に繋がれてゐる。私達は此宿命をどう考へたらよいか。異なる三個の道が目前に開けてくる。現世を断ち切って浄土に行くか、浄土を見棄てて現世に走るか。ひとつは夢幻に溺れ易く、ひとつは煩惱に流されるであらう。何れも心が満たない時に、第三の道が開けてくる。興へられた現世である。そこには何か意味がなければならぬ。よも空なる世ではないであらう。此世を心の浄土と思ひえないだらうか。此地を天への扉と云ひえないだらうか。低き谿なくば高き峯も失せるであらう。正しく地に活きずば、天の愛をも受けないであらう。「身は精霊の宮」と記されている。地をこそ天なる神の住家と云ひえないだらうか。冬枯れの此世も、春の色に飾られる場所である。地上に咲く浄き蓮華を、浄土の花とは呼ぶのである。地に咲けよとて、天から贈れた其の花のひとつを、今し工藝と私は呼ばう。（『工藝の道』柳宗悦）



阿弥陀仏去此不遠

仏は、ここを去ってしまったが、遠くにいるわけではない
『観無量寿経』

いまここに美がある

純粹理性批判の結論

～であるかのように振るまう

世界に統一と安定を与える



例) 神様がいるかのように振るまう

超越論的×工藝的

工藝的アプローチ



实例1 環境

白山比咩神社参道

この場所を神聖と感じるのは、ここに神が座すからなのか？

カントの答え

「神がいるかどうかはわからないが、神がいるかのように振る舞うことによって作り上げられた統一と安定があるのだ」



实例2 住宅

日本の伝統的民家には、その内部に外部を抱え込んだ「お座敷」という空間がある。



祭礼では、神がお座敷にやってくる。死者の魂は、お座敷から旅立つ。神仏がいるかどうかは、わからないが、神仏がいるかのように振る舞うことによって住宅は作られてきた。そして器も…



实例3 うつわ

秀衡椀とは何か

- 連続菱形紋様
- 割菱紋用
- 雲型紋様
- 植物紋様

これらが統一的に表現されている意味とは？



实例4 料理

真味只是淡

「典座教訓」
道元禅師

五味（甘・酸・辛・苦・鹹）+真味（淡）

現象界

叡智界

物自体



黒の中の黒の無限

工藝とは

「美」という

言葉にできない何かを
あるかのように想定して
具体的な色と形に現すこと